

体育科教育におけるダンス教材に関する研究 学校体育研究同志会の取り組みに着目して

スポーツ文化研究領域

5010A061-3 中森 翔

研究指導教員：友添 秀則 教授

【研究の目的・方法】

本研究では、ダンス領域における「理論的研究」の一助として、日本の学校体育に影響を与えてきた民間教育研究団体におけるダンスの教材研究に着目した。特に、本研究では、ダンスを専門としない教員や研究者たちによって展開された、学校体育研究同志会（以下、同志会）におけるダンスの教材研究に着目した。そして、同志会におけるダンスの教材研究の成果と課題を一連の教授学的思考を用いて明らかにすることを目的とした。

本研究は、文献研究によって行う。主な資料としては、学術論文や体育雑誌、同志会の発行している機関誌（「体育グループ」「運動文化」「運動文化研究」「たのしい体育・スポーツ」）及び書籍等を対象とする。

【第1章】

第1章では、ダンスの本質と動きに着目した時期の同志会における教材研究の特徴、ダンスの教材研究について論じた。第1章では、ダンスの本質と動きに着目した時期の同志会における教材研究、ダンスの教材研究について論じた。

同志会では1955（昭和30）年に結成され、「生活体育」、「中間項理論」を経て、「運動文化論」へと研究を深めていった。

ダンスの教材研究については、創作ダンスと民舞の二つの動向が確認された。

創作ダンスの研究においては、ダンスを芸術分野でとらえ、そこからダンスの本質が追求されていった。そして、1968（昭和43）年の合田の提起によって、動き自体へと研究の視点が移っていった。そして、動きの基礎として「跳躍」「回転」「バランス」の三要素が提起された。くわえて、

空間における基本的な表現形式として「遠近形式」と「シンメトリー形式」が提起された。

民舞においては、1961（昭和36）年に丹下より民舞を「ダンスの教育内容として位置づけるべき」（学校体育研究同志会、1989、p.145）との提起がなされた。しかしながら、当時の研究水準では具体化までには至らなかった。1966（昭和41）年の村瀬の提言によって、同志会の民舞研究は本格化する。民舞においてはエチュード（教材作品）の作成に研究の視点が向けられていた。

【第2章】

第2章では、教材作品による指導が進められた時期の同志会の教材研究について論じた。

同志会では、1960年代後半から1970年代前半における、「日本社会、すなわち、職場・地域・文化・教育の民主化運動の高揚」（村上、2004、p.103）を背景に持ちつつ、「スポーツの主体者形成論」が展開される。

また、同志会の研究体制の確立により、同志会の研究は発展を遂げていった。その一方で、新たな問題も浮かび上がってくる。それは、「系統の一人歩き」である。同志会においては「系統の一人歩き」を克服すべく、「学力論」を展開していった。

創作ダンスにおいては、1972（昭和47）年に提起された「動きの基礎技術」と「空間における基本的な表現形式」をもとに、それらを含みこんだ教材作品の作成が行われていく。ダンスの授業を創作から始めるのではなく、教材作品によって動きを教えることから始めようと試みたのである。そして、「走れカーボーイ」といった具体的な教材作品も開発され、実践が進められていった。

民舞においては、前章に引き続き教材作品による指導が志向され、研究が進められていた。そして、創作ダンスの分野で提起された「動きの基礎技術」と「空間における基本的な表現形式」を援用した教材作品づくりにも取り組まれていく。

【第3章】

第3章では、同志会におけるダンスの教材研究の成果として「舞踊教育構造化試案」と「動きの基礎学習とエチュード」に着目し、それぞれの特徴を明らかにした。そして、同志会におけるダンスの教材研究の成果と課題を明らかにした。また、「舞踊教育構造化試案」へ教授学的思考を用いた検討を加え、その成果と課題を明らかにした。最後に、明らかとなった同志会におけるダンスの教材研究や「舞踊教育構造化試案」の成果や課題をふまえて、今後の方向性を提案した。

1980（昭和55）年の第76回冬季研究集会において提起された「舞踊教育構造化試案」は、民舞実践の増加と創作ダンスにおける動きの基礎や空間構成が結実したものであった。「舞踊教育構造化試案」の特徴としては、「動きそのものへ着目した」「教材作品（練習作品）による指導、学習」「創作ダンスと民舞の両方に共通している」の3点があげられた。

また、「舞踊教育構造化試案」の重要な要素である「動きの基礎学習とエチュード」の特徴についても明らかにした。動きの基礎学習とエチュードでは、動きの過程を意識するために、「内的動き」（進藤、2001、p.59）に着目し、さらに骨格にフォーカスすることで、より動きの過程を意識し、動きの学習ができるものだった。

さらに、同志会におけるダンスの教材研究の成果と課題について検討を加えた。同志会におけるダンスの教材研究の成果として以下の3点があげられた。

- ① 現存する舞踊文化遺産を総体としてとらえ、日本の舞踊文化遺産、そのなかでも民族舞踊を教材化する実践・研究を位置づけてきたこと
- ② 舞踊表現の技術構造を解明し、基礎として教

えるべき内容と方法の確立を課題としてきたこと

- ③ 創ることに傾斜した学校ダンス界で、創る以前に踊ること自体の楽しさを追求する立場より、既成作品の指導を位置づけてきたこと（学校体育研究同志会、1989、p.144）

課題としては「系統の一人歩き」「『現代的なリズムのダンス』への対応」「同志会のダンスへの考え方」の3点があげられた。「同志会のダンスへの考え方」では、学習に多くの時間が必要とされる課題が明らかとなった。

そして、最後に岩田（1994）のいう一連の教授学的思考（何のために、何を、何で、どのように）を用いて、「舞踊教育構造化試案」の成果と課題を明らかにした。成果としては「学習内容が明確である」点と「学習の方法が確立されている」点の2点があげられた。また、舞踊教育構造化試案には「内容的視点」と「方法的視点」の2要素を満たしており、「よい教材」であるといえる。一方、教授学的思考を介した検討の結果、課題として「教材の一人歩き」があげられた。これは、同志会におけるダンスの教材研究の課題でもあげられていたものであり、重要な課題であるといえる。

最後に、今後の方向性として、「系統の一人歩き」に対してはダンスの学習内容の明確化と、「身体技法の言説化」（進藤、2002、p.11）や、動きを記録するための舞踊符の必要性を述べた。また、「現代的なリズムのダンス」への対応として、リズムに特化した研究の必要性を提言した。「同志会の考え方」についてはダンス学習に多くの時間が必要である点には、指導言語の選定や教材作品の選定を提言した。また、さらなる実践の蓄積も、上述の課題を克服していく上では重要であることを提言した。

【結章】

本研究では、同志会におけるダンスの教材や教材研究についての検討を行ってきた。しかし、それは理論の域を脱するものではないといえる。よって、より具体的な実践研究が必要であると考えられる。

また、同志会以外の民間教育研究団体のダンス教材研究については言及できなかった。従って、同志会以外の民間教育研究団体についても本研究で行ってきたような検討を加える必要があると考えられる。